

三子集

巻



くつろぎ

徳本  
文庫

永田文庫

同井氏  
恒高印

数々の事ハりて海を心の味とて八山里ハ万葉おそ  
く梅の花とて新なる山里ハ新歳おそくといひて可  
む免は咲きとて心のそくに於て海を此れお敷く之山里  
万葉の述らふ計れはよく八平句の位あり先師も好む  
其を合ふものと知るへくともはよりける能書も作る  
題乃中より重出する事ハ多くなきこととて出ても大振  
師此云敷くは拙協の物才三れとの平句のおとと位あ  
るものとおとくにかく云ふハ阿久良位を足知るへくとい  
又いそくをとり合ふるに句れ好むひやと規規有と

一ノ村も傍るこ門人へよにふたへ言詞あり  
又いそく人の方よめに整句を平持あり有り藤向季  
のま聖合障りやれを考へ一ノ句作りはれ一ノ字を  
出さるハもさおるり一ノ字をさへ

一ノ此松の何れを年業且に用る年一ノ字を  
とまのつと侍れハ師のいそく連人のつとあつてハ端よ  
及とま去年喜季のまよとつとあつても季にふとま  
とま一ノと一ノ師のいそくまれつとに按とあつてつと  
城宜とのと句小あつとつとまなやまはつと古とま  
中かまつたよのふあつとつとに神あつれ一ノ

多尔系安此夏句つとつとやホ乃言結するハつ村あもほ  
読て小そのおつてつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
言振のまもれとけつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
その言にま一して清瀬川此つとつとつとつとつとつとつと  
まつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
皆句他の亦つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

師のいそく下句上句つと二字之字此君小何聖まつとつと  
三字にまぬり落る句何聖骨折(まも)

師のいそぐ持て来る詞とふはりて人に人の名取とよめる  
こと

師のいそぐ素秋のゆせぬ方先よまゝに習ひて時よある  
日いそぐ花より花付ぬるはあめてりもふりたるは夜のこと  
日いそぐ能諧ハ教てあさきは亦何りよく通るにあり或人乃  
とふハ皆て通きれたる袖とかきて是るやうにて毎る袖あり  
師のいそぐ或人の句ハ艶をいそぐとまゝに依て句艶よわらば  
を艶より何れも又或人の句ハ志何りなりとほくんとまゝ  
れよとほくなり又或人乃句と作よきて人の世を考て  
ふ乃他より詞乃作好へるはと

又いそぐ格ハ句よりとねることをいそぐにあらはしむる  
と付隠士のお裁は隠士と出さぬ後よきてせん候なりとふは  
くし加は後の隠士はして何やまちに必しやむ所よわらば  
教句ハ門人も作若ある附合と老乞のちよとふは  
くし或能虫よある

句れとくはのこかゝるあもわけて人の勝を志する所  
もの好きさるるによりて言下に心乃とく笑ふる人  
をたきさふと師のいそぐあり

師のいそぐわらうも多くの集に事語り多し是哉とら  
去本より門人の志といく二三句やつ事添てあらはれ仙

宛そもいふ此つ人を初として志城いふ事ある下り号城發  
 の小文とせん又小文と斗やと云は号と或方而て能え付る  
 小太刀とつふは謡はけりわ至宜集の名と思ひまゝの書  
 号に下流しと云ふものなりと考に足重し一掛号はわさ師は城  
 万よんを以有ゆ之 隙ある能諧の時青やとつふ句に月夜  
 師一是城月よまきしとて秋を付物一八月と云月夜城  
 出せり月秋の堪取よよひやと出合き水はくそゆ一これゆ  
 切つりと能去下りま

牡丹よ芍薬と付るゆいある師一是と心の好取まて差合ま  
 かわる付らる傷あふ付く物と師一とと師乃詞之  
 万よ此れわさし一門人らめてまき事之

隙のいよく相似する句ハ集にまを射外よ重てはさしりく  
 せらるゆ一後猿蓑よ隙れ蓑叢の花の句猿籠う蓑叢の花  
 一亦よりまこと重傳ると之 付句れらけいらくしひゆれ  
 時りあ句と添く付心の形をゆちとなしうてえさしと  
 さゆし句とけりせし又傳くまきしゆもゆま

又猿蓑に狼之と二体は付まけて那一重なり心付て見る  
 一とと身ハぬれ紙のより亦たさといふ句を云出付れハ師の口  
 一と一休形よ足く付る之体格ハ宜加し一ふけて勤に物あり  
 又琴之味線の折句ぬらして世上あつらひゆりらんとし句

一々又よこい語く句作りと云々れ一時も西皇道よと云む  
若の勤る亦かくのゆもわると云ふ一こ

或二三子能語よ志不ありて奇仙二之巻老翁よ長成よふ  
師是とけ次再之の後その人よ對していよく語者他之

志うれも我おりふ亦よ非を志わやと云ふ人とせハ是彼の内ハ  
二三子り句と捨れ一抄やお侍人とこそその人狩心しや

まゝと終よせ師の門み入とならま  
師の旨句を天下の人よおなへるゆハやと一一人二人す

かゝるゆゆかす一人乃いぬよなれゆに侍よハかゝるゆか人  
とたうれの詞たり

師のいよく能借ぬ抄りふ亦おま終出の猶半。やうにゆせらぬ  
其ハ初公道をそこちふ亦わうと云いふねる亦とこととも

あつともおつかりん後句をなれをにゆらぎ一位よさる位よ  
素くて自身と増ん人と相さるる詞あらん末并れ迷ひてたを

かろそらにせんやとあふりに付てらよとめてはく一このことと  
師の旨其角ハ日帝に連るに一座の興よる句をゆひ出て今

ゆととも感ま師を一座そのゆね一はよ人乃いづる句を  
あふゆも有とさあふんまゆと云く座よらりて一座の人

よいれさ句をそあねふゆあ里門人者よらゆ一も角ハ  
生質と一とくにあつとと

又いふく一とせ世當面乃始いひ出れ侍台を仇讐獲さる  
 甚あつと二之目迄一戻してまゝと示されし之面白教こ  
 わる内心見まふ仙一巻四巻してと侍進ハ我おりのあふく  
 見知侍るこはよふ示那ー狩秀おハ時の仕合機嫌をうか  
 ひ子愛万化口の弁より感まきー一氣も受よ但まきーと  
 法集のくちうゆうとむ白あふよりとらゆ侍進ハ昨のいんく  
 ぬわる白ハ格あのみこさりぬくてすねさるとまハはぬ  
 うとさふいー一笑ぬ白多ーとこ

原白修りふされー時腹は戦りのいもこさよと感心の執こ  
 老師のあふ節まうとく私さと侍るあこえを執されハ成るま  
 うふるなうく共私さを侍る工夫て私さをある道有ー  
 師ある村土芳ふとさう此法に云うても機嫌をけがら  
 儀の仇讐してとま後わー此云おの詞々の誅の仇讐と云  
 事ハいふぬるゆにうと考つていふ原此をさうはあふに余さ  
 き仇讐のゆなるー原も氣にぬきされハ餘念那き仇讐  
 ハあつてつくねといふれーと

原の白まても再之吟して狩らぬくこやさうれはうえ  
 その白幸付よ人もまをえんといひ入るゆもあうあり  
 おろそらうしるるあつ人ーとらふいすーとこあこ  
 人の白あやうの教面白くゆはさるゆはーむあこ

或月次の座にてまゝを門人示す所なり  
 師のつく他譜を娘の他譜を平一人ありひとくも  
 のう小も道と云くする事かかあるあやまらもあるも  
 その衆なるもせよ他譜なるもさるも更ふ一人を他  
 譜とてそのをけりた事をたのむと

師乃神楽堂と云句を難するもの有師のつく他譜ハ平話  
 を用ひつに神楽堂といひあつて侍ハかき事ハ知  
 得とこそ後はつとをきつて一人あり師の白唯一の神楽  
 ハ神楽殿と云ハ神楽堂といふむつてくひ今も  
 益ふいた、他譜ハ神楽殿をけりた或他とあり

季小て燕の句とつとと燕の句小て季の句とけくむとむ  
 つてハ娘も今ハくつてかつ決と

師のつく絶系にむと内ハくつてふけおをてと  
 をふとぬてふ消事字と静に句とてくつぬ  
 ぬもあるもそのおのふとぬとて静かふとさる時  
 まるまゝあつてつと師の他譜と句とて大切の  
 師乃つく他譜ハ益ハ俗語を正しつとぬとぬと  
 まるまゝはつて人のあつぬと大切の事とて  
 師のつく流ハ歌ハ舞をてけ時あたとハ又句ある内ハ秀他  
 三句ハさるも中座の歌ハ舞をてけ時あたとハ又句ある内ハ秀他



中一のりとも中一のりへ侍るとなり

作のいよく撰集懐命短尺才多ふ一才やうハさう有下  
きくはうーかぬんをひありたりーと之猿との能筆さし  
とか大之佐若此名大まきい中一く又く侍るとし

能虫の物かゝる小ハ奇の詞手尔系ふと遠ふり中一あり  
ゆーさにああへうーれかあくとたつき時の拍子又さきぬ又  
くさーき所半遠へるる中一ぬーとこ

作爲に我をわかれに心をひあるとこ或方あつ半人作と  
座上は諸侍せううり志まんと作の白け不似合の亦を  
若若く之席を付れハんまふふに能借其隣は侍侍る

のりんまうにと形あこむのりこ又ある振りの附門人二二  
子供ひ物れー雨難波のきうーこ形こありなるありて  
雨の薦よ方をあーく入りやうとこその後けゆとハか  
お此地あてハ乞合め折の身を忘れて成こーとをなを  
かゝに價を人のりよとくに毎もぬー侍ると

師ある方又審まりて食の後蠟燭をとやうとーととり  
衆の交る半眼よとていせりさささかくあつてあつて  
それ自身の故能借こつていふとくいのちも又かくのこ  
とくは考の能借亡師のいふと

あるとー其旅り乃の記まこー米のよーあつていふ

ををこひて見ゆしとまれし師の心くはのこるる所あり  
死て後見付しハ是とくも又阿利れ西てん所もあつて  
感心なる詞に見きれもあられぬ

原一とせ岐阜持何見の時持尉一人は十二冊宛毎冊  
して其ひりよれをきふ十二冊の纏て横ぬきとれ  
はくねむつていふもさやましく是をなす持尉ははる成  
居るは侍れハ是もちられぬよりのさきてちまのちられぬ  
と又さくむつていふもちられぬよりのさきてちまのちられぬ  
とつり方は此にある所とあり

あつて人のゆをいひておのれをいひてさよめれもち付ける  
中江まへていふもちたつてもあつてたつ世情はあつて  
人情をいふれハ人少細きとて宜友あつてハたつていふ  
又いふ人是非なき節多し今其地あるへうははとあ  
る三人の方にもあつていふ老後うらふ乃さつてもあつて  
え侍るもあり

一とせ大和の法隆寺に太子は開帳するの次太子乃冠えお  
中へ侍るも後の開帳は又整れ之かゝる古代のりれを  
ちよひて整立れ一師のちのかとさひやと  
ある禅僧話のゆをきくもいふは原の白詩のゆハ後  
士素量とのゆのいふもあつて好むのゆて人も名を忘れ

多しかきつひよ云詩ハ隠者の詩風雅の旨と云々  
原のいづく空寂々又それ秘意にこぬ人を入りしつゝ後ある  
この秘といふはきく難なる秘意をわしむる亦をわしむる撰者  
の才とて去られざる亦をわしむるかまふしむるのいふべき  
難ある亦も難いといふこのちねを秘といふとたりの秘意を  
し免くと師といふべきを

伊勢の宮にこそを垂て花の積とちる水いとあはれ文字  
たたくても下を重よてあうくすへるといふ五文字年々く  
水清くはみて水のかくくはる山花のちりかきと  
いへる五文字終骨の宮なりと師のいふ

渡川たたくまあうくくはれ水もくくかへ人にわし清め  
この宮にくくくはむくくくは字何れとくく字二改わり義  
理ハ何れとく人ぞ人よあうくくくくくくくくくくくくくく  
の云何れと義理を結てたるうけいやくくくくくくくくく  
水のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
清ハ年々くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

古今此席に前人のうくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
貫之のまかせるく師のいづく難くくくくくくくくくくくく  
終骨乃亦とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
乃ち我意との宮乃くくくくくくくくくくくくくくくくく

と可味と

かきくたのちハ秋とを玉とつらふりかきくたの情と長らう  
きさのゆとを免とてそのゆ成天乃とたけ一節と情とゆ  
きさと多しとてそのゆとを可味とて其向はとてさうと  
其向の本所とてそのゆとを可味とて依と

漢底ハ言志砂のあうとたるとひとてこれとてなると其  
又漢底ハ言志砂のあうとたるとひとて空寂ハ言志砂の  
の情とて其向の情とて新まへ三首の言志砂の歌とて上  
冬とてそのゆとを可味とて其向の情とて久しく情と  
秋のちとて其向の情とて其向の情とて久しく情と

其向の情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と  
又そのゆとを可味とて其向の情とて久しく情と

情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と  
この二と情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と

はとて其向の情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と  
二つ物とて其向の情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と  
情とて其向の情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と  
陰濁とて其向の情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と

其向の情とて其向の情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と  
夕とて其向の情とて其向の情とて其向の情とて其向の情とて久しく情と

んふとたつられに世人のいづくも古今傳まら  
 人よ及ぶる金白とせらるるもよらう一原のそめあり  
 いまの後萩草にあはれ萩は似るあまき別心せよ萩  
 角地と萩一草と素直萩萩萩と名付れり  
 伊弉の海まると海石見の海東國の名ふれりも名ふれり  
 素とがきていづる萩のそめ

二月末より用るる正月二月とあまき雨と又月と  
 又月雨と云晴万や萩やうに云まのく六月夕立七月雨  
 かくるへー九月末時多と十月時多を後と名くとれ

いひあさるるあまき二月四月七月八月の名にきとらへ

東風春風と東風困凍と虫文有友は南風秋は西風を  
 冬少風と漢み雨と秋まのそめ砂法と一されも  
 そのちあひハあひさう友き嵐なれやうにきとるるまはれ  
 花も花といひく嵐と和もつらと秋の初風とつ嵐と云  
 中秋あはれ風と野分と云初あはれ風と本かじと云あ  
 冬にきてハ嵐ハあはれあまき連あまき

菅の五月よる秋とも用る時六月雪よ異れと一十月と用  
 秋まきもかきと一日くくせとのまにひきと秋もきと初秋  
 十月日中よハ不雪曇りハとく 夕立ハ夕時とらあ

あつ初くも昼より後はあるやうにと連歌さ

帆の巻入達の筆入も夜くむし一紙のふ紙よりこひん入く  
まると帆ふふ今より船紙よりつとまをそと送と云今れ筆  
入き送人誌もれ所順送にもに夜取り筆よりしし師  
の云く 舟舟めはさる字をにとよむと縁をえに云  
難波とちまをとりし雲とらあ云

ふ乃給はらのけりさささひりの約芝蔭のきしんせと  
つとちりふ乃折ふ夏の心くささささささささささ  
くささ心の形をもあまれくく又あまれくくさささささ  
とも云 鹿日麻すたれさささささささささささささ

つ子年田う畑う極物う結ひてはささ

田霧の水きり里らうくつ子年田う畑う結ひてはささ

船の月い十七日より十八日すてこ

魚よもあされハ船ハ先たく魚よもあ声よあささ  
らんあくとらよも船子とら先たく又船よもあささ  
水よもあ折よもあ魚よもあ浪の杭よもあしんあささ  
空あらの云魚よもあ雲の音くさささささささささ  
た喜れ小もあさささささささささささささ

砂層流あささあれあささささささささささささ

つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

一と云ふはく物言ふに依てまふまの者よけしと申す  
 もよ先ん原のいふはのゆゑもよふあつて  
 らぶ書ハ音の肉とられよのいふに世奇ふらふ

苗代の代とらひかゝるといふ義理をまの苗代地を  
 一して新母傳のあよむむ義理とていふ

夕まられゆきりくして夕のあよむまらり秋まの  
 秋まらひのいふは物とていふ

夕まらりといふゆゑに休め字と書てたそれとれまらり  
 志り一此る人のえ申さうてさるの程とたそれとて  
 られとらふ義理をいふ人傳にまらひまらひのいふは

そしれ昔帽子をまら大をいふゆゑのいふは

まらりれ落やけ野に焚抄より芽は出るといふは

かつとまらんとまらり同いふれり

氷の衣といふゆゑに氷のうらにかいと有て糸とたれとて  
 らしを佛道といひたるゆゑとていふ

俊と云ふ玉極と理よむたるおくと云

着ふのぬ白ハ初まらるの初先三日れ肉と申すよハ初  
 春の内子といふはかゝりて連ふといふ事とあり

處を敷と畳と似ぬよの夜の懸とらふは月  
 よ信ひてするよ一連ふあり

月の影と上の句下れ句小節と連てさう月又  
月小節日といさふおと云ふは身物は日影をうら  
うらと身物なうていさういふ人といさういふ偈也あや  
涼ともいふと連てああり

師のいさう大方の家よハ何のなりぬらんたれとにさうい  
液くらりいさうハ時立はは務ッあて西台いさうい

あさひハ師宗通ふとの方へ句はあしとを影ハ時きてあさ  
法ありたといハ一吹雪り一射去籍とさういさういさうきて自費  
とさういさうといさういハ懐紙はまのあさういさうい別紙はまて  
宗通の方を添削のうらまのあさういさういそのあさういさういハ

少はあうけい

大夢の喧花仕切は淡の方  
淡の如大あきさを吹きて

巨の引垂しを彩り

葉風

芭蕉先生

又云く  
慈介

何氏蘭風

何

人の方へ句を送るに折紙は徳様



半端子旅立送る	何 — —	氏号・月日	芭蕉移
---------	-------------	-------	-----

或ハ半端子旅立送る人ニ依テ早ク  
 人ヨリテ早ク又早クも亦  
 亦亦も旅立送る事とも亦  
 紙四ツ折一折ニ先の名氏号と半端  
 付紙と送る付紙は赤きを用白  
 牌又表紙と用白  
 小包ハ紙袋と用白畧一と上包  
 拜机 合凡  
 たりき早に

名氏送る折紙設法

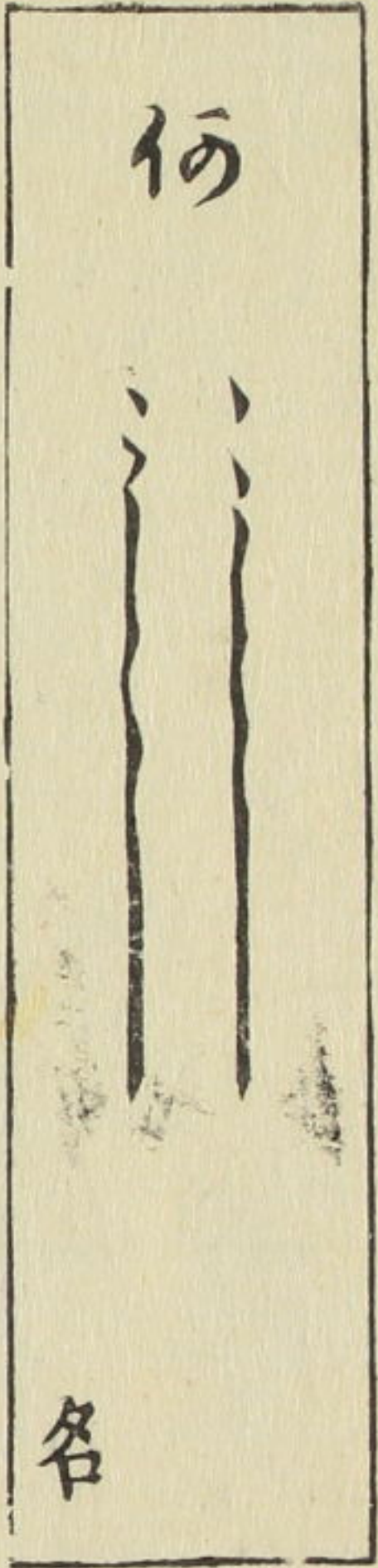
山岸氏	宜為車案作	氏号・月日 芭蕉判
-----	-------	--------------

又何氏何氏何氏  
 宜為何氏案作

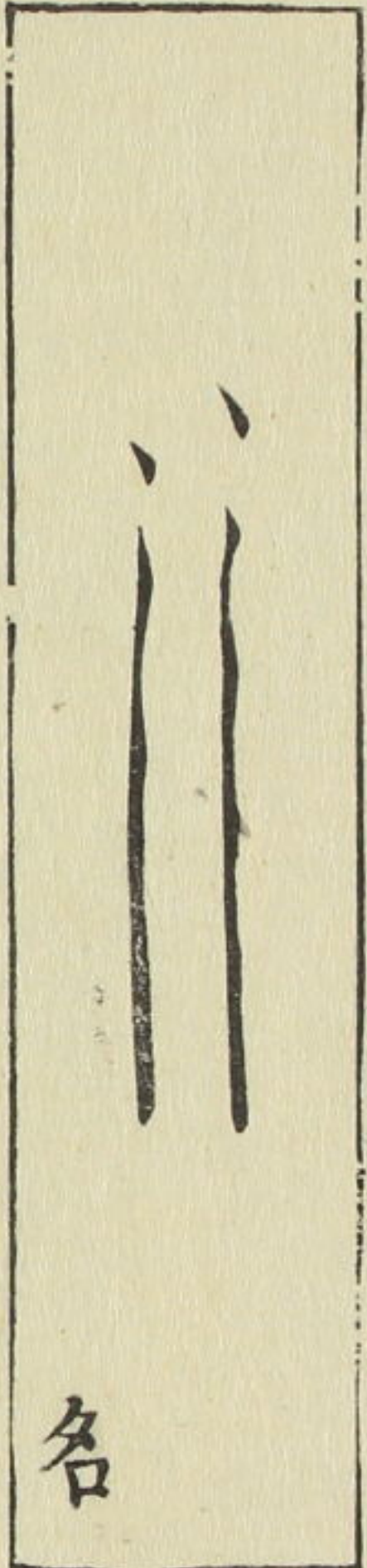
白分  
名判

を紙短冊乃こ

紙の上下のり考ハま雲の方上之  
裱の耐も紫雲上之



名、協入考ル卑下之



名

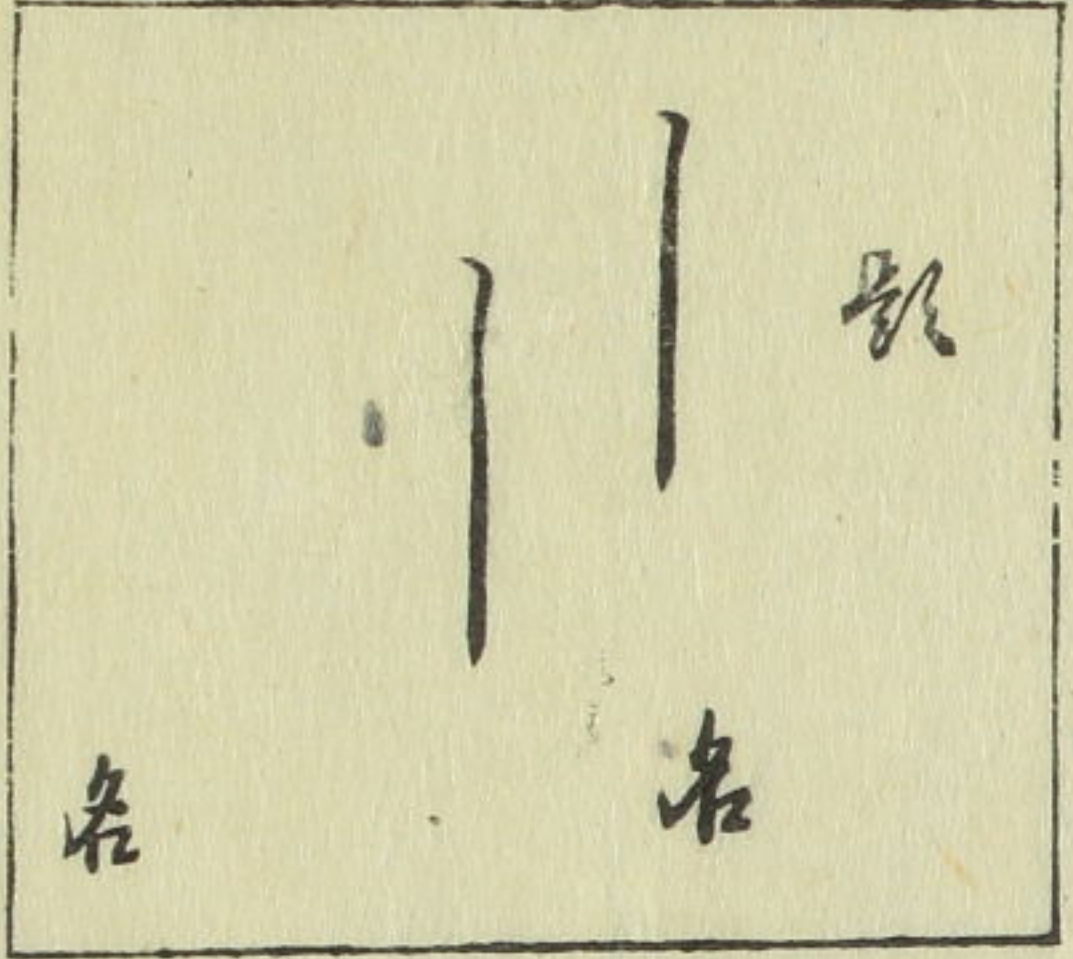


名

三折一丁下出紙と出付之  
紙の耐対ハ一字上上テ  
云紙あるとも下り考ル  
一字も上之



花の短冊言かお又付る耐も水引西付る一節之付るあり  
さ一色ひとつよまて一む正ひし付る之  
み引穴紙の久四角にまもま甲に穴を付る考れと一



名

名の字換考の通若唐号考と  
考つる耐も

菘虫尾服部土芳

名主とも考とく

菘中軒 肥ア土考子

肥ア氏とも考一と考

考又長考ハ八分也



奇抄紙二行七字

之行之字

霽

つる日にむくあじの  
岩とれく内海屋と  
むく岩のそ

紙の折ぎ  
つひの料紙  
のそ

飛ろは乃のけのく  
みのやふまきくけみま  
まもぬくまきまめ  
そく

享和元辛酉春再刻

蕉門書林

大坂心齋橋筋

太示良屋長兵衛

橋屋治兵衛 合

井筒屋庄兵衛 梓

同三条寺町西入  
菊舎太兵衛

1914年11月14日  
1914年11月14日

